



写真①
石狩浜に漂着した
プラスチック

いしかり 博物誌

161

4/27(土)～6/23(日) ※火曜休館、4/30(火・休)は開館、
5/8(水)は振替休館

テーマ展 海プラ

年間800万トンが海に流れ込むという、プラスチック製品とその破片。石狩浜にはどんなものが流れ着いている？

時 9時30分～17時 ￥ 入館料大人300円、中学生以下無料

所 いしかり砂丘の風資料館(弁天町30・4)

プラスチックの海辺

海が荒れた後の石狩浜は、オレンジ色、黄色、水色など、カラフルに彩られることがあります。漂着したペットボトルやプラスチック製の容器、ビニール袋、浮きの破片などです。陽光を浴びてきらきらと光る様子は、まるで海辺の宝石箱のよう……(写真①)。

20世紀初めに実用化されたプラスチックは、安くて加工しやすく、さびたり腐ったりすることのない安定した物質です。そのため、第二次世界大戦後、急速に普及しました。ちよつとまわりを見回してください。

プラスチックだらけです。すね。

でも反対に、生物にいろいろな悪影響もあります。石狩浜の漂着物

にも、その一端が見えるのです。

例えば、プラスチック容器やチューブをよく見ると、四角く切り取ったような穴が空いていることがあります(写真②)。これ

は、ウミガメがエサと間違えて食べた跡と考えられています。死んだクジラや海鳥の胃袋から大量のプラスチック片が出てくることもあります。切れた釣り糸は、カモメの脚に絡み付き、身動きがとれなくなったり、脚が切断されたりします(写真③)。また、ポリタンクには、危険な薬品が残っていることもあります(写真④)。

安定したプラスチックは、いつまでも分解されることはありません。紫外線で劣化し、波にもまれる間に砕けてどんどん細かくなっています。が、数センチや数ミリ、さらに目に見えないくらいマイクロサイズになっても、いつまでも自然界にプラスチックとして残り続けます。しかも、小さく砕けていけばいくほど、破片の数は桁違いに増えていきます。ペットボトルを1本拾うのと、ミリ単位の細切れになった1本分の破片を拾い集めるのと、どちらが大変でしょう？

プラスチックが誕生してから、これまでに海に流れ込んだものは全部で1.5億トンにもなるそうです。さらに毎年800万トンが新たに流れ込んでいます。石狩浜にも、ロシアや韓国、中国など外国からの漂流プラスチックがたくさん流れてきます。もちろん一番多いのは日本製ですが、海辺に漂着しているゴミから、世界の陸と海で今、何が起きているかに気づくことができます。

(志賀 健司)



写真④過酸化水素(劇薬)のポリタンク



写真③クチバシと脚に釣り糸が絡まった
カモメ



写真②ウミガメがかみ切った痕跡



石狩市学芸員
志賀 健司 Kenji Shiga

専門は地質学・漂着物学・海辺学。地球の環境の変遷などを調べるとともに、石狩の浜辺にどんなものが漂着し、それがどんな意味を持っているかを研究している。

関文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711 ※火曜休館

ERIS「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ(<http://www.i-eris.tv/>)でもご覧いただけます。